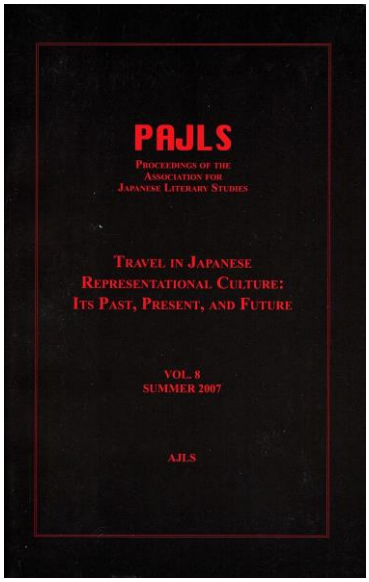
「植民者二世の初恋――湯淺克衛「カンナニ」再考――」
"A Second-Generation Colonizer's First Love: A Rereading of Yuasa Katsue's *Kannani*"

松浦芳子 Matsuura Yoshiko

Proceedings of the Association for Japanese Literary Studies 8 (2007): 384–391.



PAJLS 8:
Travel in Japanese Representational Culture: Its Past, Present, and Future.
Ed. Eiji Sekine.

植民者二世の初恋　――湯淺克衛「カンナニ」再考――
A SECOND-GENERATION COLONIZER'S FIRST LOVE: A REREADING OF YUASA KATSUE'S *KANNANI*

松浦芳子
Matsuura Yoshiko
Purdue University

植民者の少年と被植民者の少女の初恋物語である「カンナニ」は、先行研究が指摘するように、作中、植民者の目と被植民者の目が交錯するものの、植民者の目で終結される。同時に、少女カンナニの持つ躍動感は、作品がステレオタイプの旅先の恋物語の構図を抜け出たような印象(或いは錯覚)も与え、作品の再考を促す。本稿は、日朝混血の少年を主人公とする「心田開発」、湯淺の内地への思いを綴ったエッセイ「故郷について」にも言及しながら、ポストコロニアルの視点から「カンナニ」再考を試みる。

湯淺克衛は、1910 年（明治 43 年）に香川県善通寺に生まれ、7 歳の時、父が巡査の試験に合格し朝鮮で警察署に勤めることになり、京畿道水原に移住した。途中、進学、帰省などで日本に戻った時期を除き、1945 年の引き上げまでの約三十年間を植民地で過ごした。1919 年（大正８年）に反日民族運動である「三一独立運動（万歳事件）」を、朝鮮で運動が最も激しかった水原で目撃する。1934 年、24 歳の時に「カンナニ」を書き、文芸誌『改造』に投稿したが、最終選考に漏れ、1935 年に文芸誌『文学評論』に発表することになった。検閲の為、前半部分には伏字が数箇所あり、後半は削除された。浦田義和によれば、前半の伏字の部分は、「総督府の朝鮮統治に関わる真相の表現と、日本人少年達の朝鮮人少女へのひどい性的傷害の部分である[1]。」　後半は、徳永直が「カンナニ」の付記に記すように、三一独立運動が取り扱われていた為、削除された。戦後、湯淺は伏字の部分を補い、後半を思い起こし「カンナニ」を書くが、アメリカ占領軍の検閲のもとで発表された為、浦田の指摘通り、後半は前半に比べ、生彩に欠ける。「カンナニ」はこのような状況の下、1946 年に再出版された。本稿は、戦後再出版されたものを分析する[2]。

「カンナニ」は、十二歳の日本人少年、龍二と十四歳の朝鮮人少女、カンナニとの初恋を描く。植民地や植民者と被植民者との関係を描いた作品はこれまで日本の文学には稀で、その点において「カンナニ」は特異だと

---

[1] 浦田和義 「日本近代文学とアジア――1920～30年代前半の文学雑誌に現れた「朝鮮」文学と湯浅克衛の登場」（『九州大谷情報文化』31、2003、3）8頁

[2] 本稿で扱う「カンナニ」、「故郷について」、「心田開発」は、インパクト出版会より1995年に刊行された『カンナニ』をテキストとして使用する。戦前・戦中の国名等の表記は、テキスト及び引用文献に従った。『カンナニ』からの引用は、本文中に頁数を記す。

評される[3]。　植民者と被植民者との関わりを扱った作品として、後藤明生の「夢かたり」を思い起こすが、敗戦の時、中学一年生だった著者が中年になって過去を思い出して書いた作品である。「夢かたり」は、作者の朝鮮における少年時代の思い出が夢の形式で語られ、日本人少年と玩具店の朝鮮人老女とのやりとりが描かれる。その玩具店は日本人集落とは小川で隔てられ、小川には幅二メートルの土橋が掛かっている。玩具店の向こうには朝鮮人集落が広がる。日本人少年は、その土橋を渡って、玩具店までは行くがそこを越えて朝鮮人集落に足を踏み入れることはない。後藤は作中、「どぶ川にかかった土橋は僅か幅二メートル程のものであったが、その向こう側は、わたしには知ることの出来ない謎のような朝鮮人たちの土地だったのである[4]。」と記す。実際、植民地において、植民者と被植民者が頻繁に接触することはなかったようで、「夢かたり」もそのような事情を反映している。「夢かたり」とは異なり、「カンナニ」は植民者龍二と被植民者カンナニの接触を中心に据えて描いている。

湯淺は、「カンナニ」の冒頭で正月の遊びに興じる朝鮮人の子供達の輪に入りたいが入れない主人公の苦い思いを描く。龍二は、朝鮮の子供からは、「倭奴」と怒鳴られ、父親からは、「そんな 鮮 童の遊ぶものなど」と取り合ってもらえない。湯淺はそれぞれの蔑称にカタカナで読み仮名を振り、龍二と朝鮮人の子供との溝を描く。正月の描写の後、龍二とカンナニが嫁入り行列を眺める場面が続く。ここで二人の友人である朝鮮人の少女オンニョナーに二人の仲を冷やかされ、カンナニが龍二に将来五十円を出して自分を嫁にしてほしいと言う。カンナニもオンニョナーも龍二と少女二人の間に横たわる植民地構造をよく理解しているが、これに対し、龍二の方は照れるだけで、この植民地構造をカンナニとの関係に持ち込むことなど思いもつかない風である。この花嫁花婿の行列を見送った後、今度は日本人の少年達が龍二とカンナニの間をからかうが、これに対し、カンナニは「日本人の小学生は、ほんたうに豚の子だ」（12）と激怒する。この言葉に居たたまれなくなった龍二は走り去るがカンナニにとりなされる。ここでも植民者としての自覚に薄い、初心な龍二と二歳年長の被植民者を自覚するカンナニとの初恋が甘く描かれる。この後、この甘い初恋の下部に広がる植民地の構造が二人の父親の境遇において暴かれる。龍二の父親は四国の製罐工場を首になったが、総督府巡査の口にありつき、更に、李子爵邸の請願巡査も兼ねるようになり朝鮮家屋をあてがわれ、息子の龍二を中学校へ行かせることができた。一方、カンナニの父は土地家屋を没収され、投獄され、子供を教えていた書堂も閉鎖され、どうにか李子爵の門番にしてもらったのである。正反対の社会経済的流動を示すそれぞれの家の事情を背景に二人の初恋が始まる。湯淺は家の事情を記すことで二人

[3] 田中益三が「夢見る頃を過ぎても――湯浅克衛と中島敦」（『日本文学誌要』54、1996、７）に紹介した栗原幸夫の批評は「カンナニ」のこの特異性を強調する。
[4] 後藤明生　『夢語り』（中公文庫、1988）17頁

の初恋が植民地での歪んだ出会いから始まったことを隠さないが、直後に、カンナニの龍二に対する純な気持ちを全面に押し出し、更に、ハイブリッドな世界が容易に達成しうるという楽天主義を示すことで、二人の背景にある植民地の歪みを霞ませる。

「ね――日本人は皆嫌ひ、巡査は大嫌ひ、それでもお前は大好き」
カンナニは龍二の顔を両手ではさんでのぞき込むやうにして――
「タンシンはお前のことよ。朝鮮語おぼえなさい。わたくしが日本語話せるやうに。ね、そしたらお前と私は朝鮮語と日本語と交ぜこぢやで話できるね。学校の話や、そのほか、いろんな世界中の話、たくさあーんしよう」（18 頁）

カンナニの言葉は、二つの言語が境界線上に均衡を保って並び立っているかのような錯覚を与えるが、現実は、カンナニは植民地教育によって日本語を押し付けられ、母国語は追いやられようとしている。二人が二つの言語、文化のハイブリッドな空間で出会ったことは確かであるが、カンナニの楽観的な言葉とは裏腹に、二つの言語と文化が決して均等に混ざることのない歪な空間が二人の前に広がっているのである。カンナニの言葉は、植民者二世・湯淺のハイブリディティに対する無邪気な見解が透けて見えるが、龍二に朝鮮語を学ばせるに充分な説得力はあった。

龍二は、カンナニを通じ朝鮮語を学び、朝鮮人の視点を身につけ、次第に朝鮮人に同情するようになる。洪水のあと、命がけでまくわを取ろうとする朝鮮人の子供達を見に行くエピソードは、龍二がカンナニの目で現実を見るようになったことを示す。龍二は、最初は朝鮮人の行為が理解できないが、朝鮮の厳しい食料事情を後に学ぶ。池田浩士は以下のように指摘する。「――龍二がこれを知ることができたのは、カンナニをかれが知ったからだった。カンナニの目で現実を見るようになったからだった。だがもちろん、カンナニの目でかれが現実を見たのは、半分まつだけのことにすぎない。かれの目の半ばは、生命がけでウリを拾う 鮮 童 たちを「無智で軽はずみ」だと感じる日本人の目であり、マクワを少しも美味だとは思わない日本人の目であり、そしておそらくは、路傍で車座になってマクワを食う朝鮮人たちをただ軽蔑的にしか見ない日本人の目である。この半分の日本人の目を、龍二は、別の半分のカンナニの目によって、見つめなおすのだ。・・・[5]」　龍二は、更に、朝鮮市場でもカンナニによって己の日本人の目を見直す機会を与えられる。母親から不衛生だと禁じられていた飴をカンナニから貰い、その旨さを「棗飴もさらし飴の棒も、ゴマ飴も、こんなうまいものを龍二は食べたことがないやうな気がした。眉をひそめた母親の顔が、なんだか馬鹿らしくなつてきた」（34 頁）と実感する。しかし、物語は龍二の目が開きかけたところで終末へと向う。

[5] 池田浩士　『[海外進出文学]論・序説』（インパクト出版会、1997）56～57頁

市場で二人は憲兵が泥棒に発砲するのを聞き、川淵まで逃げる。「よいことをしても縛られることがあるからねえ」（38 頁）というカンナニの言葉が示唆するように、次章から三一独立運動をめぐる話が展開され、カンナニが行方不明になる。行方不明になる前、龍二は母親の目を盗んで久しぶりにカンナニに会い、龍二の為に作っているという銭袋を見せられる。龍二は行方不明のカンナニを巡査の父親と捜索するが、血のりの付いたこの銭袋を見つけるだけであった。龍二とカンナニは、水原で出会い、その城壁の中で二人の関係は発展するが、カンナニの死によってその関係は終末を迎える。水原の街は二人の初恋を育んだが場であるが、二人にとってのその意味はまったく違う。南富鎮は次のように述べる。「龍二一家にとっては新しく発見した安住の場所で、カンナニ一家にとっては安住の地からしだいに窮地に追い込まれていく場所なのである。この根本的に対立したもろい土台のうえに二人の関係は設定されていたのである[6]。」　南の言う様に、この二人は出逢いから植民地の構造に絡め取られている。龍二はカンナニの目で物事を捉えなおし始めるが、彼は、決して自分の日本人の目がどのように構築されたのかを問うことはない。物語の終結部分では龍二の半分開きかけた目はカンナニの死で再び閉ざされるであろうことが了解される。それでも尚、作品はカンナニの躍動感を鮮やかに伝える。この点について次に考察してみたい。

カンナニは植民者にとって都合よく造形された少女であり、自分だけは被植民者を搾取しないという龍二の偽善的態度を糾弾することはしない。しかし、全くの親日的被植民者でもない。先行研究が指摘するようにはカンナニは独立運動の活動家、柳寛順をモデルに造形されており、作中、日本批判をする場面も少なくない。「カンナニ」をステレオタイプの植民地小説だとする否定的な評、ぎりぎりの抵抗を試みたとする肯定的な評、評価は分かれ定まらないが[7]、カンナニの躍動感まで否定する評は少ないようだ。田中は次のように述べる。「過去に向いた志向の中で、植民地下の希有な男女を未成熟な美談のまま、凍結させた。機を見るに敏な湯浅の処世はさておき、最後まで民族エゴイズムの視線に気づかず、郷愁をもってしか朝鮮というテーマに向き合えなかった湯浅。（中略）けれども、皮肉なことに、カンナニという少女の輝きは失せない。「行って見ようよ」と川へ峠へと龍二を誘い、思慕を寄せる少女の在り方は、「それでもお前は

---

[6] 南富鎮　　『近代文学の＜朝鮮＞体験』（勉誠出版、2001）144頁

[7]注(1)の論文において浦田は「カンナニ」に対する複数の評価を紹介し、中野重治や池田浩士の肯定的評価を妥当としている。又、同一の批評家においても湯淺の作品に対する評価には幅がある。南富鎮は「湯浅克衛文学と朝鮮総督府の心田開発」（『稿本近代文学』23、1998、12）においては「心田開発」に湯浅の総督府政策に対するしたたかな批判を読み取っているが、一方、注(6)の『近代文学の＜朝鮮＞体験』においては、後述する通り、湯淺の批判的な視線は、心理的な抵抗であり、体制への抵抗には直接つながらないと指摘する。

大好き」というストレートなものだから[8]。」　このように批判的な評もカンナニの直截な物言いが放つ輝きを読み取っている。殺された少女カンナニが読後も生きるのは何故か。作品「カンナニ」が男が日常から開放され一時の恋を楽しみ、元の生活に戻るという旅先の恋物語の構図からは抜け出たような印象を与えるのは何故か。私見を述べれば、これには湯浅の内地への複雑な帰属意識と　朝鮮への歪んだ郷愁が関係しているのではないだろうか。主人公龍二は作家湯淺の分身・植民地二世として造形されており、そのアイデンティティは植民地への移動と居住で構築されたものであり、内地の生活において形成されたものではない。旅先の恋を楽しんだ後に戻っていく元の生活を持たない植民者二世によって語られた話が「カンナニ」である。現実的には湯淺は明らかに日本に帰属し、そこに戻り、生活を始め、上記の田中の評が指摘するように、植民地的視線を省みることなく「カンナニ」を書き直した。だが、湯淺の視線は、植民者二世独自の帰属意識と朝鮮への郷愁を内包し、「カンナニ」を旅先の恋物語に終らせなかったようだ。

湯淺は内地への複雑な思いをエッセイ「故郷について」で述べる。エッセイには、徴兵検査で父親の生地である徳島へ行った時に味わった故郷に対する違和感、母の故郷愛媛県八幡浜も自分の故郷とは呼べない疎外感が述べられている。エッセイは中学を卒業した後、友人達と受験の為上京する車中でのエピソードで締めくくられている。乗り合わせた客に学校を問われ、京城中学と答えたところ朝鮮人に間違われ、不愉快になった仲間の一人が長々と素性を説明したが、それを聞いて湯淺が不思議な感情になったというエピソードである。最後に湯淺は自問する。

> お郷里は朝鮮ですか――と問はれて、何故皆はあんなに急にいやな顔をしたのだらう。
> どうして、「えゝさうです」と直截に快活に答へられなかつたのだらう。
> では、お前達の故郷は何処にあるのだ。（458頁）

植民地二世は、内地を故郷と呼べない現実と植民地構造を基盤に形成された内地の日本人の外地の日本人への差別に直面する。内地の日本人は、在朝日本人を見下す。この事実を理解する在朝日本人は、内地に憧れ、朝鮮を見下す。カンナニの巻末に置かれたエッセイ「外地引揚者」には、そういった事情がよく記されている。内地の少年が南方引揚者を乞食と蔑んだという話であるが、外地引揚者は、戦前も戦後も日本の弱者層に位置し、更に悪いことに戦後は社会の厄介者と見做されると湯淺は指摘する。戦後、外地から引き上げた日本人は、内地への憧れが失望へと変わる。湯淺は、

[8] 田中益三　注(3)に同じ。17頁

在朝日本人が持つ内地日本人への複雑な感情と故郷としての朝鮮への愛情を「心田開発」という作品に描く。

「心田開発」の主人公は、「棗」の金　太郎であるが[9]、　東京の大学を卒業した後、水原に戻って心田開発を目のあたりにする。心田開発とは1935年の初頭、農村振興十ヵ年計画と共に打ち出された政策で、朝鮮人の心の開発を目的とした。湯淺は、「カンナニ」において日本の植民地支配に抵抗する朝鮮人を描いたが、「心田開発」においては、日本精神に適応しようとする朝鮮人――神社に昇進のお礼参りをする青年、朝鮮の歌ではなく日本の歌を口ずさむウェイトレス、日本の工場で働く為に日本語を学ぶ女――を批判的に描いている。金　太郎は昔の水原を懐かしむ。何故、金　太郎は人や風景が変わること、言い換えれば、日本化することを望まないのか。それは日本の植民地支配に対する抵抗なのか、或いは、朝鮮人が日本人を擬態することに対する抵抗なのか。池田は、「心田開発」を湯淺の文学的な最後の抵抗の作品と位置づけるが[10]、これに対して、南富鎮は、湯淺の水原の変化への抵抗は、心理的な抵抗で直接的に体制批判には結びつかないと分析する[11]。湯淺の郷愁を南は次のように表現する。「故郷としての朝鮮への郷愁があり、場合によってはある種の強い愛情を持ちながらも、日本人と区別されるかたちで、いつも変わらぬ朝鮮社会への郷愁なのである[12]。」

更に、南は在朝日本人が一番激しく創始改名に抵抗したと指摘する。彼らは、内鮮一体というスローガンにも関わらず、朝鮮人が完全に日本に同化してしまうことを望んでおらず、これは、バーバの擬態―植民者が被植民者に植民者の文化、言語を擬態させる時、完璧に植民者への変容を意図しない―に通じる[13]。　作中、金　太郎は、変わり行く水原を見て、ノスタルジックに昔の水原を思うが、これは日本の植民地政策、内鮮一体を批判するものではなく、ただ、金　太郎の水原への郷愁は、植民地体制へ馴化する朝鮮人への批判へつながるだけである。

以上、エッセイ「故郷について」と「心田開発」に見られる植民者二世の内地日本への希薄な帰属意識と外地朝鮮へのノスタルジアを考察したが、このような植民地二世の有り様が親日的被植民者を完全な形で作り出すことを踏みとどまらせ、「カンナニ」を旅先の恋物語の構図からは辛く

---

[9] 「棗」の主人公は、血の上からもハイブリッドな存在として創造されている。主人公の名は、金、太郎で朝鮮人の父と日本人の母の間に生まれる。「棗」では、湯浅は金と太郎の間に読点を入れているが、「心田開発で」は金　太郎と読点は入れず、一字開けて表記している。　池田は『[海外進出文学]論・序説』（50頁）において、金　太郎は「内鮮同化」の生きた実例だったと指摘する。

[10] 『カンナニ』「解説」610頁

[11] 南富鎮　注（6）に同じ。198～199頁

[12] 南富鎮　注（6）に同じ。203頁

[13] ホミ・K.バーバ著/本橋哲也、正木恒夫、外岡尚美、坂元留美訳　『文化の場所』（法政大学出版局、2005）第4章「擬態と人間について」参照

も抜け出させたようだ。だが、これらの要素がカンナニに息を吹き込むに充分な力を発揮したとは思われない。それでは、カンナニの躍動感はどこから来るのであろう。二人の出逢いの場面と前述したカンナニの直截な表現を分析し、被植民者の声について考察してみたい。

> 「わしが小学生云ふのなんで知つてるのぞな」
> 自分の国の言葉を流暢に喋るこの朝鮮の女の子をまじまじと見ながら、龍二はお’く’に’言葉を丸出しにした。すると今度は女の子の方が笑ひ出して、
> 「小学生は、をかしな日本語使ふのね」
> と云ふのである。(15 頁)

ここでは、龍二はカンナニの話す植民地日本語を話さない日本人であることが強調されている。植民者であるが、カンナニが押し付けられている日本語が話されている世界からは遠い所からやってきたという、龍二の内地における位置が窺われる。湯淺はエッセイで故郷がどこにあるかわからないと述べたが、龍二にはお’く’に’があるように描いている。湯淺が故意に龍二に方言を話させ、龍二が朝鮮人を苦しめている日本人とは違う日本人なのだというメッセーを送ることで、カンナニを安心させ、植民者と被植民者との歪な出会いを自然な出会いとして演出しようという意図も見えるが、少なくとも、湯淺は「をかしな日本語」が話されるお’く’に’と「植民地日本語」政策を推し進める国との差異を自覚していて、それをカンナニに指摘させたようだ。勿論、龍二のお’く’に’は、龍二の祖母が「気の荒い外つ国」(13 頁)に渡る子や孫を心配したり、龍二が「朝鮮を征服した豊臣秀吉みたいな英雄になりたい」（14 頁）と思う等の植民地主義言説に満ち溢れた場ではあるが、カンナニが学ばされている「植民地日本語」教本を編纂する場ではない。湯淺も龍二も気付づかぬ、「植民地日本語」とは異質の「をかしな日本語」の可能性をカンナニが指摘しているような印象を与えるのである。更に、カンナニの「ねー日本人は皆嫌ひ、巡査は大嫌ひ、それでもお前は大好き」を考察してみると、これは、前述の田中の批評も取り上げるように耳に残る台詞である。植民者龍二にとって実に都合のよい言葉であると知りつつも、カンナニの紛れもない気持ちとして響く。お互いのポジションを越えるような関係でありたいというカンナニの希望がストレートに表されており、そういう関係を不可能にするものは何かという問いかけとして読む者の耳に残るのではなかろうか。カンナニの問いかけが聞こえるとするのは、被植民者・カンナニの声——植民者によって造形された被植民者の、本来聞こえるはずのない声——を聞きたいとする欲望ゆえの錯覚だという批判を免れないかもしれないが、この声が消えないから、カンナニの輝きは失せないのである。

植民地二世の湯淺は、植民地で構築したハイブリッドなアイデンティティ、希薄な内地への帰属意識、外地への郷愁を背景に作品を書いたが、彼

の主人公達は日本と朝鮮の間を揺れ動く。「カンナニ」において、植民者龍二は被植民者カンナニによって目が少し開かれたが、己の日本人の目が植民地の文脈においてどのように構築されたかを問うことはしない。湯淺自身、引揚者の悲哀を充分に味わったであろうが、故郷喪失者でも棄民でもなく、日本に帰属しているのは紛れもない事実で、作中、ハイブリッドな要素は中途で投げ出され、振子は日本へ振れ戻ったという感は否めない。しかし、こういった作者の事情は別にして、カンナニは植民地小説の裂け目からその声を発し続ける。